

三瓶山の生い立ち

三瓶山は中国地方で最も新しい火山である。約 10 万年前に形成が始まり、以来少なくとも 7 期の火山活動を経ている。第 I 期には「古三瓶溶岩」と言われる溶岩ドーム（固まった溶岩の円丘）ができた。第 II 期は約 5 万年前に始まり、さらなる噴火で古三瓶は陥没しカルデラが形成された。第 III 期と第 IV 期は約 4 万 5000～1 万年前で、大量の火山碎屑物が周辺地域に広範に堆積するほどの大きな噴火が繰り返し起こった。今日、日影山の山頂は第 IV 期に形成された溶岩ドームで、現在の三瓶山の最も古い部分である。

最初の 4 期は最も激しいもので、火山碎屑物と固まった溶岩の層の上にまた同様の層が積もっていった。第 V 期と第 VI 期は約 1 万年～4 千年前まで続き、比較的小規模の噴火をともなった。しかし第 VII 期は、いくつかの理由から特別なものだった。およそ 4,000 年前に始まった第 VII 期の噴火によって、山頂は現在の地形となった。第 IV 期カルデラの内側から溶岩ドームが隆起することによって男三瓶、女三瓶、子三瓶、孫三瓶の 4 つの峰が生まれた。最後の峰である太平山は、第 VII 期の噴火により形成された灰や火山生成物によってできた火山碎屑丘だ。第 VII 期の噴火により 10 メートルを超える火山灰や堆積物が積み重なり、小豆原埋没林をつくった。

最初の 7 期は地質的な記録によりはっきりと辿ることができるが、第 VII 期の溶岩ドームの上に積もった灰はより最近の活動を示唆しており、第 VIII 期があった可能性が考えられる。